



北の文脈ニュース 第68号

第36回企画展「寺山修司—生誕地弘前と父そして俳句—」

◆平成24年1月15日～平成24年12月28日◆

寺山修司は、映画・演劇の脚本や演出を数多く手掛け、劇団「天井棧敷」を主宰して国内外で公演、アングラ演劇のカリスマと称されました。

その寺山修司の生誕地が弘前であることは、あまり知られていません。本人もこれまで、生誕地については、さまざまに書いてきました。

寺山修司の父、寺山八郎は、六戸村^{いぬおとせあざふるまぎ}犬落瀬字古間木、現在の三沢市の生まれですが、弘前の東奥義塾で教育を受けています。ここに八郎と弘前との縁が生まれます。東奥義塾を卒業後は警察官となり、青森署などに勤務するのですが、1935年(昭和10)、昭和天皇の弟君、秩父宮殿下が第三十一聯隊大隊長として赴任することになり、その警護のため弘前に移り住みます。それが弘前市の紺屋町です。ここで再び弘前との縁ができ、その時に寺山修司が生まれました。それについては、母・寺山はつ著『母の螢—寺山修司のいた風景—』の中に書かれています。今まで曖昧であった、寺山の生誕地が明らかになったのです。

また、詩人・歌人として評価が高い寺山修司ですが、中学、高校時代は俳句作りに没頭していました。高校時代には、校内に「山彦俳句会」を創り、そして、全国の高校生に呼びかけて、高校生の俳句雑誌『牧羊神』を発行しました。

寺山修司の自叙伝『誰か故郷を想はざる』のなかで寺山は、「中学から高校にかけては、私の自己形成にもっとも大きい比重を占めていたのは俳句であった。この亡びゆく詩形式に、私はひどく魅かれていった。」と述べています。その頃作られた俳句は青春俳句として、最近、注目を浴びています。

国内外で、いろいろな分野で活躍してきた寺山修司ですが、彼の原点は“俳句”といっても過言ではないでしょう。寺山修司の青春、俳句の足跡をどうぞご覧ください。



父・寺山八郎



生後6か月・弘前公園で



前列中央、修司（撮影・藤巻健二氏）

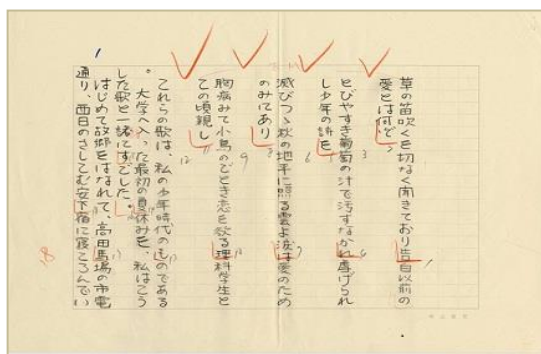


高校時代の寺山の俳句が掲載された雑誌

展示資料紹介



左から『短歌研究』第11巻第11号
 短歌研究社 昭和29年11月1日刊
 『われに五月を』
 作品社 昭和32年1月1日刊初版
 『はだしの恋唄』
 的場書房昭和32年7月15日刊初版
 『空には本』
 的場書房昭和33年6月刊初版



草稿「愛の歌」全12枚

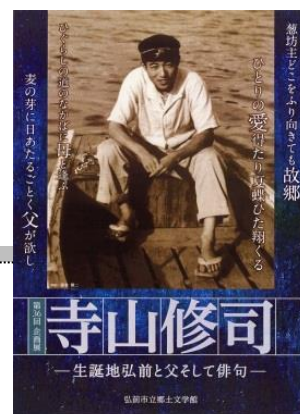
当館所蔵の資料、初公開の寺山直筆の草稿です。発表先は不明ですが、大ヒット曲「時には母のない子のように」の1節が書かれています。鉛筆書きに、朱筆の校正入り。特徴のある字が寺山の個性を感じさせます。

寺山修司の初期作品の出版物4冊。いずれも発行部数がとても少なく貴重なものです。「チェホフ祭」で『短歌研究』の第2回新人賞を受賞したことで、寺山の名前は全国に知られていきました。『われに五月を』は、処女出版です。数多くの出版物を残している寺山ですが、すべてはここから始まっているのです。

株式会社テラヤマ・ワールドのご協力により、このたび展示することができました。

企画展図録発売

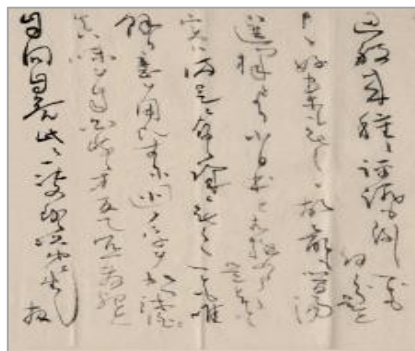
第36回企画展「寺山修司－生誕地弘前と父そして俳句－」の図録が完成いたしました。寺山文学の足跡を探る上でも充実した一冊となっております。観覧の記念にぜひお求めください。全24ページ、頒布価格500円



新資料紹介

陸羯南書簡 ^{あえばこうそん} 饗庭篁村宛 明治27年(推定)1月24日(封書 巻紙 毛筆書)

作家^{あえばこうそん}饗庭篁村(当時、朝日新聞記者)宛、陸羯南自筆書簡。羯南が主筆兼社長を務めた日本新聞社で、新聞「日本」のほかに家庭向けの新聞を発行することになり、紙名が「小日本」に決まった旨を伝える一文です。「小日本」は、明治27年2月11日に正岡子規が編集主任となって創刊され、130号(同年7月15日)まで発行されています。



書簡の一部「～小日本と相極め申候」の文あり



高校時代の太宰(藤田本太郎撮影)

次回スポット企画展「太宰治の高校生活」

◆平成24年4月1日～8月31日◆

昭和2年4月、官立弘前高等学校に入学した太宰治は、弘前の藤田家へ下宿します。太宰の実家、津島家から藤田家に宛てた手紙を中心に展示します。